池上遼一・矢口高雄と「ガロ」の広がり

解説 呉智英

創刊以来、「ガロ」は意欲あふれる新人に誌面を開放してきた。今でこそ、同人誌が簡単に作れるようになり、また、大手出版社の出すマンガ誌も新人発掘に力を入れるようになったが、70年ごろまでは、新人が作品を発表できる場所は限られていた。創刊当初から新人の投稿を歓迎していた「ガロ」は貴重な発表場所であった。

「ガロ」出身のマンガ家というと、林静一、佐々木マキ、勝又進、花輪和一、日野日出志、蛭子能収、ひさうちみちお、近藤ようこ、杉浦日向子、根本敬……、こんな人たちの名が浮かぶ。貸本誌や「COM」（67年〜71年）でデビュー後に「ガロ」に足場を移した新人作家を含めれば、この倍ほどのマンガ家の名を挙げなければならない。

ところで、これらのマンガ家は、マニア向けの作風であったり文芸趣味が濃厚であったり、いかにも「ガロ」的である。蛭子や杉浦のように、芸能人、文化人としては広く知名度が認められている人もいるが、大手雑誌連載の人気作が単行本になると軽く百万部を越す現状を考えれば、「ガロ」系マンガ家はマイナーとの印象はぬぐいがたい。

しかし、マイナーな作家たちの陰に隠れて（という言い方もおかしなものだが）「ガロ」はメージャーな作家も世に送り出している。池上遼一と矢口高雄はその双璧だろう。ともに、物語を絵に乗せる技術は抜群であり、これがメージャーなマンガ家としての成功をもたらした。

池上遼一は、「ガロ」創刊二年目の66年九月号に早くも月例新人賞入選を果たしている。『罪の意識』というミステリー風の短編作品である。以後、67年八月号に『夏』、同年九月号に『地球儀』、十一月号に『禁猟区』、十二月号に『三面鏡の戯れ』と続く。いずれも犯罪や幻覚をテーマにした短編で、60年代前半までは命脈を保っていた貸本劇画の伝統を引くものだ。緻密でバタ臭い絵の上手さはこの頃から既に際立っていた。折しも多忙になり始めた水木しげるがアシスタントを募集しており、水木プロの重要な戦力となったことは水木の自伝に詳しい。

68年以降も、池上遼一は年に何本か「ガロ」に執筆し、72年には長編『おえんの恋』を連載する。これを最後に、大手雑誌に舞台を移した。

大手雑誌での代表作は、74年から「少年サンデー」に連載された『男組』（雁谷哲原作）である。まだ新左翼の〝叛乱劇〟の残照が感じられる時代に、学園を舞台にしたアクションドラマが水滸伝風にロマンチックに描かれ、人気を集めた。池上遼一の絵の上手さは海外でも定評があり、英語やフランス語にも翻訳されている。

矢口高雄は、池上遼一より少し遅れ、69年四月号で新人賞入選している。高橋高雄名義の短編『長持唄考』である。秋田の嫁入歌を背景に、顔に火傷の跡のある娘を持つ母親の悲劇を描いたものだ。以後、69年にさらに二本、翌70年にも二本、短編を「ガロ」に掲載した。この四作の名義は橋高雄となっている。いずれも秋田の庶民の生活を題材にした素朴な作風のものである。白土三平の影響の下にマンガ家を志した矢口だが、白土の荒々しく雄大なドラマツルギーよりも、自然への志向や庶民への眼差しを受けついだようだ。

大手雑誌には、70年から「少年サンデー」に梶原一騎原作の『おとこ道』を連載した。名義は矢口高雄である。この作品はいかにも梶原らしいマッチスモに貫かれたアクション・ドラマで、矢口には合わなかった。戦後の無警察状態における朝鮮人と日本人暴力団の衝突事件の描写に差別的な部分があると問題にもなった。矢口としては自分に不向きな原作の惹き起こした事件であり、不本意きわまりない気持ちだったろう。以後、「ガロ」新人作の頃の純朴路線を堅持し、メージャー作家として成功を収める。

代表作は『釣りキチ三平』である。

■池上遼一『ガロ』発表作品

号	作品
1966年9月号	罪の意識（入選）
1967年8月号	夏
9月号	地球儀
11月号	禁猟区
12月号	三面鏡の戯れ
1968年2月号	風太郎①
4月号	風太郎②
8月号	風太郎③
9月増刊号	ぼやけた世界
10月号	トモ子さんとハト子さん
11月号	すばらしき世界
1969年2月号	電動式義手
6月号	白い液体
10月号	かげろう
11月号	雪国
1970年3月号	スリップ
12月号	風の日の出来事
1972年2月号	おえんの恋①
3月号	おえんの恋②
4月号	おえんの恋③
5月号	おえんの恋④
6月号	おえんの恋⑤
7月号	おえんの恋⑥
8月号	おえんの恋⑦

■矢口高雄『ガロ』発表作品

号	作品
1969年4月号	長持唄考（入選）
7月号	ひとつねた
12月号	赤んぼの里
1970年4月号	狐の棲む里
9月号	みなぐろ

●『男組』／小学館刊

矢口高雄

●『釣りキチ三平』／講談社刊

これは73年から「少年マガジン」に連載され、当時としては驚異的な長期連載作となった。釣りブームと重なったこともあるだろうが、少年誌では少なくなった純朴明朗マンガであることが最大の要因だろう。日本の農村漁村風景を描いた『釣りキチ三平』だが、意外にも、このテレビ・アニメがフランスで人気を得ている。

池上遼一・矢口高雄の二人に共通するのは、一種の職人性である。「ガロ」的なものが、文学青年趣味、露悪趣味、眼高手低、生硬さ……といった言葉を感じさせるとすれば、二人の職人性は「ガロ」では異質かもしれない。しかし、創刊号からの主柱であった白土三平はいうまでもなく、水木しげるも、つげ義春さえも、職人的な漫画作りの技倆は具えている。その意味で、池上・矢口も十分「ガロ」的なのであり、半面、70年前後の「ガロ」の広がりを二人は象徴しているとも言えよう。